

トワークを重点的に研究することで、啓蒙専制体制下の公共圏の問題に迫ることを目標にしていた。

今回の長期研修の成果として、ゲオルク・フィリップ・ヴーヘラーが幹部を務めていた秘密結社ドイツ・ユニオンのメンバーが多数関わった瀆神事件に関する史料をオーストリア国立文書館一般行政文書館 (Österreichische Staatsarchiv, Allgemeine Verwaltungsarchiv) で収集し、分析を進めたことである。また、帝室・宮廷・国家文書館 (Haus-, Hof- und Staatsarchiv) では、フランツ 2 世 (オーストリア皇帝としてはフランツ 1 世) に伝わって残った史料群である皇帝フランツ文書および機密文書 (Vertrauliche Akten) を調査し、ヴーヘラーと直接関係しているわけではないが、1780 年代後半および 1790 年代のフランス革命に影響を受けた活動についての記録文書を収集することに成功した。こうした活動において 1781 年の検閲緩和に端を発するハプスブルク君主国における出版の自由の拡大を利用したヴーヘラーの出版活動の影響がどの程度あったのかについて今後分析と考察を深めていく予定である。また、ドイツでおこなった史料調査において、禁書販売でウィーンを追放された後のヴーヘラーの活動の痕跡がわかる裁判記録等を発見した。これも直接ウィーンでの出版活動と関係するものではないが、ヴーヘラーという書籍商を理解する上では役に立つ史料になるだろう。

具体的な研究内容についても少し触れたい。これまでヴーヘラーの社会的ネットワークを調査してきて、1787 年にドイツのハレでバルトによって結成された秘密結社ドイツ・ユニオンとの関係は、ヴーヘラーがハプスブルク君主国で熱心に勧誘活動をおこなっていたことから重要であることはわかっていたが、ドイツ・ユニオンの具体的な活動は可視化されることはなかった。今回、改めて調査した瀆神事件に関する史料からは、ドイツ・ユニオンに入会していた啓蒙的な聖職者たちがバルトやドルバックの著作を教区民に紹介し、また啓蒙的な説教をおこなうことで手工業者たちの間に批判精神を植え付けようとしていたことがわかる。瀆神事件で逮捕された靴屋の親方たちは、自然の体系に基づく宗教観を抱いており、無神論に行き着いたものもいた。手工業者たちが政治的な意味でジャコバン主義の信奉者であったか、史料からはわからないが、彼らを教唆していた啓蒙的聖職者たちは、少なくともドイツ・ユニオンの目的として掲げられていた人類の啓蒙活動に従事していたといえよう。そう考えると、瀆神事件はドイツ・ユニオンによる民衆啓蒙の

一事例として捕らえることができる。ヴーヘラーがウィーンにおけるドイツ・ユニオンの組織化にどの程度関わっていたかはまだわからないが、彼が幹部であったことから一定の役割を担っていたと推測される。秘密結社のネットワークについては、史料的制約からはっきりとした結論をえることは難しいが、今後も調査を継続していきたい。

副次的な研究成果としては、今回の研究課題と直接関係するわけではないが、オーストリア継承戦争中にあったマリア・テレージアがハンガリーで戴冠式を挙行したときにおこなわれた戴冠儀礼に関する史料を調査し、マリア・テレージアのハンガリー女王戴冠式に関する新聞報道と儀礼実践に異同があることを発見した。この異同については先行研究でも見過ごされてきたものである。先行研究上ではウィーン宮廷と報道をおこなった『ウィーン新聞』との間には密接な情報交換があったことが指摘されている。これをふまえると、「誤報」は宮廷側によって故意に流されていると推定される。この問題を分析することによって、ウィーン宮廷側のメディア情報戦略の一端が明らかになると考えている。

2 研究成果の発表の予定

現時点では、研究成果をまとめて、ドイツ語学科の紀要『ドイツ学研究』に掲載するか、あるいは、歴史学界の査読雑誌に投稿して公表する予定である。副次的な研究成果としてあげたマリア・テレージアの戴冠式については、7月14日から7月18日まで開催される国際18世紀学会で口頭発表する予定である。

3. その他

今回の研修では、家族を帯同したことによって、海外での生活基盤を整えるまでに、予想以上に時間を要した。また、娘が重度の卵アレルギーを持っており、最初に預けていた保育施設で、アナフィラキシーショックをおこし、救急車を要請する事態になったことで、転園などを含めて幼稚園での様々な配慮が必要となった。こうした問題は、研究活動の面ではマイナスに働いたようにも思えるが、海外でこれまでしてこなかった経験をしたことは、今後研究や教育を進めていく上で糧になると考えている。